

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論文題目

日本語教育のためのマルチモーダル・
コミュニケーションの基礎的研究
—メディアを要素とした「場面」と「意識」の考察を中心に—

申請者

柳 東汶

2023年 2月

本研究の研究目的及び研究課題

本研究は、日本語教育において主流である言語中心のコミュニケーションの捉え方を、言語以外の部分まで含めるマルチモーダル・コミュニケーション¹の観点に捉え直した上で、メディア²という要素を含めて、コミュニケーションの実態と意識を考察するものである。そして、その成果が、これからの日本語教育においてどのような意義を持つかを考える。

具体的には、マルチモーダル・コミュニケーションの実態と意識として、一つひとつの行為がどう現れるかという実態と、その行為に関するメッセージの送り手・受け手の意識を明らかにする。そして、各行為の出現に当たって、メディアがどう影響するかを明らかにする。その成果から、日本語教育においてどのような知見が得られるかを考える。

以上の研究目的に基づいて、本研究では、以下の3つの研究課題を設定する。

- 研究課題 1 様々なメディア³でのマルチモーダル・コミュニケーションにおけるマルチモーダルな行為の実態とその意識は、どのように現れるか。
- 研究課題 2 マルチモーダル・コミュニケーションにおいて、人は、メディアの影響をどのように受け、マルチモーダルな行為を行い、解釈⁴するか。
- 研究課題 3 様々なメディアでのマルチモーダル・コミュニケーションの研究は、日本語教育にどのように活かすことができるか。

第1章 序論

日本語教育は、コミュニケーションを重要なキーワードとしている。しかし、コミュニケーション行為の形式は言語を中心に捉えており、言語以外の行為は研究・教育の対象として相対的に扱われてこなかった。それは、言語以外の行為もコミュニケーションを構成する重要な部分だと認識しながらも、その範囲が広いため、研究・教育の対象としてどう捉えるかという検討が容易ではないという問題が大きかったと思われる。

¹ 本研究では、「マルチモーダル・コミュニケーションは、文字や音声、表情、視線、ジェスチャー、色、音楽、写真、絵など、様々なモードを用いてメッセージを伝え合うコミュニケーションの様相であり、また、その様相からコミュニケーションを捉え、考える観点」と規定する。

² 本研究では、メディアを「コミュニケーションにおいて、相互間にメッセージ（の中の記号）の生成、発信、解釈を可能にする物質的なもの、もしくは環境」と捉える。

³ どのメディアを研究対象とするかは、第4章を参照。

⁴ マルチモーダルな社会記号論（クレス 2018 など）の概念で、メッセージの受け手が、送り手のマルチモーダルな行為を受け手がそのまま受け入れるのではなく、受け手自身の社会・文化、興味・関心に基づいて記号を創り、メッセージの意味を捉える過程を意味する。

そこで、本研究では、コミュニケーション行為を行う方法に関する要素としてメディアを取り上げ、マルチモーダル・コミュニケーションを具体的に研究する軸として設定する。ペン・紙とスマートフォンでは書く方法が異なるように、コミュニケーション行為を行う方法はメディアによって変わる。これは、日本語教育においても注目する必要がある。

以上の研究背景から、本研究では、冒頭で述べた研究目的、研究課題を設定する。そして、研究課題を明らかにするために、以下のように、本研究を構成する。

表 1 本研究の構成

構成	章	内容
序論	第 1 章	本研究の研究背景、研究目的、本研究の構成について述べる。
理論的研究	第 2 章	日本語教育と関連分野におけるマルチモーダル・コミュニケーション、メディアの先行研究を検討する。
	第 3 章	先行研究から確認した課題を行うための理論を援用し、本研究の理論的枠組みについて述べる。また、その理論的枠組みによる研究が日本語教育に活かされる部分を述べる。
実証的研究	第 4 章	実証的研究の研究方法について述べる。
	第 5 章	日本語話者 3 名が、対面で行う会話場面について調査し、分析、考察する。
	第 6 章	日本語話者が、e ラーニングの形態で講義を受講する対面を調査し、分析、考察する。
総合的考察	第 7 章	日本語話者が、LINE チャット上で、一対一でコミュニケーションを行う場面について調査し、分析、考察する。
	第 8 章	理論的研究、実証的研究の内容を踏まえ、マルチモーダル・コミュニケーションにおけるマルチモーダルな行為の様相を考察する（研究課題 1）。
	第 9 章	マルチモーダル・コミュニケーションにおけるマルチモーダルな行為に対するメディアの影響について考察する（研究課題 2）。
	第 10 章	理論的研究、実証的研究、考察の内容を日本語教育にどう活かすことができるかについて考察する（研究課題 3）。
結論	第 11 章	本研究の研究課題に対する答えをまとめ、日本語教育における位置づけを述べ、今後の課題を示す。

第 2 章 先行研究の検討

本章では、日本語教育と関連分野において、マルチモーダル・コミュニケーション、メディアに関する研究がどのように行われてきたかを概観し、検討する。

マルチモーダル・コミュニケーションに関しては、日本語教育と異文化コミュニケーション、日本語学、教育学の研究を確認した。研究成果には、研究と教育の重要性、言語能力が向上する実践研究、特定の表現形式に関する研究、日本語教材の研究、マルチモーダル・コミュニケーションに関する意識の研究があった。

メディアに関しては、日本語教育と社会学、日本語学、教育学などの研究を確認した。成果としては、メディアの特徴の記述、教育におけるメディア使用の効果、様々なメディア上のコミュニケーションの実態、人のメディア及び異文化に関する意識、メディア・リ

テラシー教育の研究が確認できた。

一方、これからの課題としては、(1) コミュニケーション行為の実態（各行為の出現や行為間の関係、場面などの要因の影響など）に関する研究、(2) マルチモーダル・コミュニケーションにおける人の意識の研究、(3) メディアをキーワードとしたマルチモーダル・コミュニケーションの研究、(4) メディアの特徴についての研究、が見られた。

第3章 本研究の理論的枠組みと日本語教育における位置づけ

本研究では、上記の4つの課題のために、マルチモーダル談話分析（O'Halloran 2004 など）、マルチモーダルな社会記号論（Kress & Van Leeuwen 2001, クレス 2018 など）、マルチモーダル相互行為分析（Norris 2004, Norris & Maier 2014 など）、メディア論（マクルーハン 1987 など）を援用する。

これらの理論を援用した上で、本研究では、コミュニケーションを「人が、自分の社会・文化、興味・関心に基づいて何らかの意識を持って、文字や音声、表情、視線、ジェスチャー、色、音楽、写真、絵などの様々なモード⁵を一つ以上選択し、メディアを通して記号を創ってメッセージを伝え、またそれを解釈すること」と捉える⁶。メディアは、「コミュニケーションにおいて、相互間にメッセージ（の中の記号）の生成、発信、解釈を可能にする物質的なもの、もしくは環境」⁷と捉える。

そして、このような理論的枠組みに基づいたコミュニケーションの研究を日本語教育に活かすために、本研究の研究課題3の下位の課題として、3-1 コースデザインの構想にどう影響するか、3-2 コミュニケーション能力の捉え直しにどう影響するか、3-3 個々人のコミュニケーションに関する文化はどのようなものか、3-4 メディアはコミュニケーション行為の難易度及び心理状態、学習の傾向にどう影響するか、を設定する。

第4章 研究方法

本研究では、コミュニケーションの実態と意識を明らかにする実証的研究を行うために、「対面の有無」「メッセージの方向」という要素から、日本語話者が対面で行う会話（第5

⁵ 本研究では、モードを、記号の形成に必要なリソースとして捉え、メディアは、人がメッセージを発信、解釈できるようにし、相互間をつなぐもの（もしくは環境）として捉える。

⁶ コミュニケーションの成立に関しては、メッセージの送り手・受け手が互いの存在を認識すれば、メッセージが送り手から受け手へ一方向で伝達・解釈される場合も成立すると考える。

章・研究 1)、講義の動画を視聴する受講の場面(第 6 章・研究 2)、LINE チャット上のコミュニケーション(第 7 章・研究 3)という 3 つの場面を設定する⁸。

調査では、(1) 各コミュニケーションの場面を録画して、どのようなマルチモーダルな行為を行うかを観察し、(2) (1) のマルチモーダル・コミュニケーションに関する日本語話者の意識を聞くため、再生刺激法に基づいたフォローアップ・インタビューを行う。

分析では、(1) コミュニケーションにおいて、個々のマルチモーダルな行為がどの流れでどのような形式で現れるかという分析と、(2) そのマルチモーダルな行為に関する送り手・受け手の意識はどのようなものかという質的な分析を行う。

このような研究方法は、コミュニケーションの表層(マルチモーダルな行為)と深層(意識)を共に分析することで、人がどのような意識を持って行為を行うかを立体的に捉えられる点から、日本語教育の研究として意義を持つと考えられる。それは、人とコミュニケーション、社会をキーワードとする日本語教育において必要だと思われるためである。

第 5 章 研究 1 —日本語話者 3 人が対面で行う会話—

本章では、日本語話者 3 人が対面して行う会話場面⁹におけるマルチモーダルな行為¹⁰とその行為に関する意識、対人印象と人間関係に関する意識の間の関係を分析、考察する。

調査方法としては、(1) 初対面の日本語話者 3 人のグループを 2 つ設定し、各グループで 30 分会話を行ってもらい、(2) 会話後、会話場面の録画データを見ながら フォローアップ・インタビューを行う、の順序で行った。

分析した結果、対人印象に関する意識が語られた行為に話題提示や質問、話の内容、視線、うなずき、ジェスチャー、発話リズム、発話速度、姿勢があった。

対人印象と人間関係に関する意識から、(1) 相手のマルチモーダルな行為から対人印象

⁷ 本研究では、表情や視線、ジェスチャーなどのマルチモーダルな行為を行うために必要な人間の身体も、メディアとして捉える。

⁸ 3 つのメディアの場面を対象としたのは、次の 3 点の理由がある。(1) 複数のメディアを研究して各々の特性を比較して考えるため、(2) 現代社会で多用されるメディアであり、研究の必要性が高いと考えられるため、(3) 日本語教育でも近年注目、活用されるメディアであるためである。上記のメディアを研究することで、日本語教育でもよく活用されるメディアをより深く理解した上で教育に活かせると考えられる。

⁹ この場面を選定した理由は、(1) 最もコミュニケーションが多く行われる場面の一つであるため、(2) 3 人会話は研究が難しく成果が少ないが、「誰により注目するか」などのマルチモーダルな行為の形式が見えやすいという利点があるためである。

¹⁰ 本研究における、「コミュニケーションを構成する、様々なモードのうちの一つを活用して行ったコミュニケーション行為」という意味を内包する用語である。

を形成する際、自分の性格や会話時の心理状態が影響する。ただし、性格や心理状態には個人差があるため、一つの行為が発端になっても、各々の受け手が受ける対人印象はそれぞれ異なる可能性がある、(2) 複数のマルチモーダルな行為のうち、より印象深い行為が対人印象の形成に強く影響し、印象が弱い行為は対人印象の形成に影響しない場合がある、(3) 相手のマルチモーダルな行為から即座に対人印象を形成せず、様々な可能性を考えながら慎重な態度を保つことがある、(4) 自分の傾向と違う他者のマルチモーダルな行為から、自分の傾向について内省することがある、(5) 言語を用いないモードの活用によって、自分の気持ちや感情などが伝わることもある、(6) マルチモーダルな行為は、それに関する知識や情報を知っていてもその都度認識せず、無意識に行う（あるいは行わない）ことがある、(7) 肯定的・否定的な対人印象がそのまま人間関係の意識につながることもあれば、つながらない場合もあり、その際、性格、価値観などの普段のスタンスが影響する、の7点が見られた。ここから、マルチモーダルな行為を振り返り、他者とマルチモーダルな行為の意識などを共有することで、コミュニケーション及び対人印象、人間関係の構築におけるマルチモーダルな行為の重要性に気づくことが必要だと考えられる。

第6章 研究2 –eラーニングの形態における講義の動画の視聴–

本章では、eラーニングの形態における講義の動画を視聴する学習場面¹¹を対象とし、受講者のマルチモーダルな行為を分析、考察する。

調査は、(1) 日本語話者が講義の動画を視聴する場面を録画し、(2) 視聴後に、学習場面の録画データを見ながらフォローアップ・インタビューを行う、の手順で行った。

調査を行った結果、うなずき、視線、メモという3つのマルチモーダルな行為が分析対象として見られた。うなずきが現れるタイミングとして、(1) 学習内容を解釈する途中、(2) 解釈が困難な場合、の2つが見られた。その様相から、他者の存在を想定せず、解釈の進捗状況に合わせて現れる行為であることがわかった。視線の場合、(1) 主に活用する媒体（画面・配布資料など）に多く目を向ける、(2) 新しい情報や、想定外の情報が現れた場合は映像に注目する、という特徴があった。(1)は、配布資料を多く見る場合は積極的にメモし、画面を多く見る場合はインプットを重視していることがわかった。(2)の

¹¹ この場面を設定した理由は、(1) 最も多く用いられるeラーニングの形態の一つであり、(2) 非対面でありながら、メッセージが講義者から受講者へ一方方向に伝達・解釈されるという特徴を持ち、他の場面と比較しやすいと考えられるためである。

新しい情報は、同じ情報源であっても、配布資料ではなく、自分の手元という領域にない映像を見ることが、想定外の情報に関しては、情報の登場による驚きや緊張から、情報のモードに関係なく、まず視覚的な媒体を追うことがわかった。メモは、(1) 映像を操作しない場合、(2) 一時停止してメモする場合、(3) メモした後に映像を巻き戻す場合、が見られた。どちらも、複数のマルチモーダルな行為を同時に行う複雑な過程があり、どの行為にどの程度集中するかをメタ的に判断する能力が必要だと考えられる。

第7章 研究3 ソーシャルメディア上のコミュニケーション

本章では、日本語話者が LINE チャット上で行うマルチモーダル・コミュニケーションの場面¹²において、どのようなマルチモーダルな行為と意識が現れるかを明らかにする。

調査方法としては、(1) 母語話者と非母語話者が一対一で、初対面から 2 週間の間、LINE チャットのコミュニケーションを行い、(2) その履歴を見ながらフォローアップ・インタビューを行う、という手順で行った。

調査した結果、絵文字・顔文字、スタンプ、笑い、改行・送信回数の調整、文章記号が見られた。そこから、これらの行為がどのような流れで、どのような形式を持って現れるか、その行為に関する自他の意識はどのようなものかを分析した。

そして、分析した結果から、マルチモーダルな行為を表す簡単な方法の登場、マルチモーダルな行為が現れるパターン、そのパターンの要因として線状性があるとわかった。また、マルチモーダル文化の概念を提示し¹³、その特性を論じた。日本語教育においては、各々のマルチモーダル文化の話し合い、内省、評価が、一つの活動として考えられる。

第8章 研究課題1の考察 マルチモーダルな行為の諸相

本章では、以上の実証的研究から見られたマルチモーダルな行為を比較し、アンサンブル¹⁴における各行為の機能を捉え、研究課題1について考察する。

¹² LINE チャットを研究対象とした理由は、(1) 最も使用されるソーシャルメディアの一つであり、(2) 日本語の文章をはじめ、絵文字・顔文字、スタンプなどの様々なモードの使用が見られ、マルチモーダル・コミュニケーションの実態が広く見られるためである。

¹³ 「コミュニケーションを通じてどのように自分を表し、他者と関わろうとするかという意識と、その意識が反映されて顕現したマルチモーダルな行為の総称」と規定している。

¹⁴ マルチモーダルな社会記号論の概念で、複数のマルチモーダルな行為が同時に現れ、共に一つのメッセージを構成する現象を言う。

表 2 マルチモーダルな行為の様相

マルチモーダルな行為	様相
文章・談話	場面によって話し言葉・書き言葉の使い分けの様相、段落の構成が異なる。
表情	場面によって表情を作る主体（人・メディアの中のコンテンツ）が異なる。
視線	場面によって主体・対象（人・メディアの中のコンテンツ）が異なる。
ジェスチャー	場面によって動きの形式の柔軟性、発話と連動する範囲が異なる。
頭部の動き	場面によって、物、動きの形式の表し方、発話と連動する範囲が異なる。
姿勢	場面によって、主体、形式の柔軟性が異なる。
コミュニケーションの速度	場面によって、速度を決定する要因が異なる。
文章記号	場面によって、使用する記号が異なる。
アンサンブル	上記の行為は、アンサンブルにおいて、経験的意味・論理的意味・対人関係的意味・テキスト形成的意味などの機能を持って現れる。

第 9 章 研究課題 2 の考察 —マルチモーダルな行為に対するメディアの影響—

本章では、実証的研究の各場面から見らえたマルチモーダルな行為とアンサンブルの出現におけるメディアの影響を比較し、研究課題 2 について考察する。

表 3 マルチモーダルな行為に対するメディアの影響

マルチモーダルな行為	メディアの影響
文章・談話	メディア間に、習得した語彙を書くか、画面の文字を打つかの違いがある。
表情	メディア間に、主体、意識の有無（意識的・無意識）の違いがある。
視線	メディア間に、主体、行為の自由度（行為をどう行うかの決定における自由度）、の違いがある。
ジェスチャー	メディア間に、主体、どの空間で行うか（2次元・3次元）の違いがある。
頭部の動き	メディア間に、主体、意識の有無、行為の自由度の違いがある。
姿勢	メディア間に、主体、意識の有無の違いがある。
コミュニケーションの速度	メディア間に、速度を調整する方法、内容を振り返る手段の違いがある。
文章記号	メディア間に、使用に関するルール的一般性・個別性、文章のジャンル、印象の有無などの違いがある。
アンサンブル	研究 1 は、身体を主に用いて各部位を自由に動かして複数のマルチモーダルな行為を同時に行うことができる。研究 2 は、身体は同じく用いるが、PC を用いて文章や図表なども活用できる環境である。研究 3 は、文章を中心に様々なマルチモーダルな行為を行うが、全ての行為が線状性の影響を受ける。

第 10 章 研究課題 3 の考察 —日本語教育における意義—

本章では、本研究の前章までの内容を日本語教育にどう活かせるかについて、研究課題 3 の 4 点に沿って考察する。

3-1 に関しては、日本語の教育・学習の流れを構想するコースデザインにおいて、言語

以外の行為を視野に入れたコースデザインが考えられる。言語を主な教育・学習の内容とする場合、言語以外の行為との関係を踏まえて構想でき、第8章で述べたアンサンブルの研究が役立つだろう。また、マルチモーダルな行為全般を教育・学習の内容とするコースデザインも構想できる。その際、本研究の実証的研究や第8章のようなコミュニケーションの実態調査が役立つと思われる。このような発想から、コースデザインやシラバスデザインを紹介する実践研究（深澤 2017 など）について、マルチモーダル・コミュニケーションの観点から検討すると、その内容を踏まえたコースデザインの展開が考えられる。

3-2 に関しては、CEFR を参照して、コミュニケーション能力をマルチモーダル・コミュニケーションの観点からどのように捉え直すことができるかを考える。CEFR は、コミュニケーションに関する能力を一般的能力とコミュニケーション言語能力に分類している。一般的能力には身体言語などがあり、言語以外の行為が含まれているが、その範囲に限りがある。ここで、言語を中心に置いて言語以外の行為を視野に入れた場合、マルチモーダルな行為全般に関する能力を捉える場合について考える。前者の場合、様々なマルチモーダルな行為の中で、言語がどのような意味や機能などを持つかを知り、行為を行い、解釈することがコミュニケーション能力になる。後者の場合、様々なマルチモーダルな行為が持つ形式や意味などを知り、行為を行い、解釈することがコミュニケーション能力になる。日本語教育を研究する待遇コミュニケーションにおいても、高度の媒材化を行う能力の向上が教育・学習の課題になるといえる。このような考察を踏まえ、コミュニケーション能力に関する実践研究（沖本他 2017 など）をマルチモーダル・コミュニケーション観点から検討すると、場面やメディアを基準にした日本語及びコミュニケーション能力の捉え方が考えられる。

3-3 に関して述べると、マルチモーダル文化に関する考察として、人とマルチモーダル・コミュニケーション、社会・文化の関係を考える際、次の2点が挙げられる。(1) 上記の3つの関係は、人が身をもって生きる社会・文化と、直接経験したコミュニケーションに限定される。(2) 社会・文化とコミュニケーションが絶えず創られ、変容するとはいえ、以前の姿が全くなくなるわけではなく、メディアに保存されたり、人の記憶に蓄積されたりする。そして、この保存や蓄積から、コミュニケーションにおいてマルチモーダル文化が現れたり、変容したりする。このようなマルチモーダル文化は、複言語・複文化主義を、マルチモーダルという観点から、より広く捉えるものとして位置づけられよう。また、研究3などで考察したマルチモーダル文化の教育・学習の活動は、一つのアクティブ・ラー

ニングとして捉えることができる。

3-4 に関して述べると、実証的研究の各場面で用いられたメディアが異なり、それによって、4 技能と見る、動かす、打つという 7 つの行動を行う方法が異なる。各行動の特徴を見ると、目標や行動の経路といった要因から難易度が変わり、コミュニケーション行為の難易度にメディアが影響することがわかる。この部分を、日本語教育においてどう捉えるかによって、学習内容として言語の 4 技能を重視するか、「(手指で) 打つ」行動も共に視野に入れるかが分かれる。後者の場合、「(手指で) 打つ」行動を行うメディアを使用した実践、理解語彙を増やす教育・学習などが考えられる。

第 11 章 結論

以上の研究内容から、研究課題への答えについて述べる。研究課題 1 に対する答えとしては、まず、実証的研究の各場面において行われたマルチモーダル・コミュニケーションから、様々なマルチモーダルな行為と、それらの行為が特定の機能を持ってアンサンブルを成すことが見られた。また、マルチモーダルな行為に関する意識としては、対人印象の形成、人間関係の構築に関するもの、動画の視聴による学習のストラテジー、マルチモーダルな行為に関して個々人が持つマルチモーダルな文化に関するものが窺えた。

研究課題 2 の答えを述べると、メディアによってマルチモーダルな行為を行う方法や形式が変わり、また、ペルソナを用いることで、コミュニケーションの態度まで変わり得るということなどがわかった。

研究課題 3 の答えとしては、(1) コースデザインのプロセスの検討、(2) コミュニケーション能力の捉え直し、(3) マルチモーダル文化の提示、(4) 日本語教育・学習におけるメディアの位置づけ、の 4 点が挙げられる。

本研究の日本語教育学における基礎的研究の意義として、次の 3 点が挙げられる。一つは、マルチモーダルの観点からコミュニケーションを捉え、具体的な実態を明らかにした点である。マルチモーダル・コミュニケーションが行われる場面の中で現れるマルチモーダルな行為とアンサンブルを総合的に分析、考察することで、マルチモーダル・コミュニケーションの研究のあり方を提示できたと考えられる。

次に、複数のメディアによる様々なコミュニケーションの場면을研究し、メディアがコミュニケーションにどう影響するかを明らかにした点がある。複数のメディアにおけるマルチモーダル・コミュニケーションの実態や意識を比較して、各々のメディアの特徴を考

察することは、日本語教育の研究として意義があると思われる。

最後は、マルチモーダル・コミュニケーション、メディアをキーワードとしたコミュニケーションの研究を日本語教育にどう活かすかについて提示した点がある。特に、第 10 章で、研究課題 3 の 4 点について考察したことによって、コミュニケーション研究に止まらず、言語及びコミュニケーション教育のための研究として位置づけられよう。

今後の課題としては、(1) マルチモーダル・コミュニケーションにおける各マルチモーダルな行為の実態に影響すると考えられる人間関係や場所などの諸要因を考慮した研究、(2) 本研究の対象に含めなかったメディア上のコミュニケーションの研究、(3) マルチモーダル・コミュニケーション教育に関する研究、などが挙げられる。

【参考文献】

- 沖本与子・高橋雅子・伊藤奈津美・毛利貴美・岩下智彦（2017）「CJL における中級から上級前半学習者の自己評価—Can-do Statements を用いた調査報告—」『早稲田日本語教育実践研究』5, pp.39-56
- クレス, G. (2018) 『マルチモダリティ』(松山雅子・増田ゆか・松尾澄英・松岡礼子訳) 溪水社
- 深澤香 (2017) 「Learner-Centred の考え方を意識したコースデザインから得た気づき」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』8, pp.35-64
- マクルーハン, マーシャル (1987) 『メディア論—人間の拡張の諸相—』(栗原裕・河本仲聖訳) みすず書房
- Kress, Gunther. & Van Leeuwen, T. (2001). *Multimodal Discourse: The Modes and Media of Contemporary Communication*. Bloomsbury USA Academic.
- O'Halloran, K. L. (2004). *Multimodal Discourse Analysis*, London: Continuum.
- Norris, Sigrid. (2004). *Analyzing Multimodal Interaction: A methodological framework*, Routledge.
- Norris, Sigrid. & Maier, Carmen Daniela.(Eds.) (2014). *Interactions, Images and Texts: A Reader in Multimodality*, Boston & Berlin: De Gruyter Mouton.